

令和元年6月27日現在

機関番号：35502

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2017～2018

課題番号：17H07290

研究課題名（和文）大学教育の「洗い流し」を阻止する中等社会系教員養成カリキュラムの開発研究

研究課題名（英文）Development of Secondary Social Studies Teacher Training Curriculum to Prevent "Washed Out" in Higher Education

研究代表者

大坂 遊 (Osaka, Yu)

徳山大学・経済学部・講師

研究者番号：30805643

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：教員養成期における高等教育の学びの「洗い流し」と被教育体験に基づく教育観への回帰を阻止するため、文献調査とそれをふまえた教育実践を行った。文献調査では、米国社会科における「Rationale Development（理論的根拠）」概念の提唱者へのアクセスと重要文献の提供をもとに、教員養成期～初任期における「駆け出し期」の教師への教師教育者の積極的な介入が「洗い流し」の阻止に有効であることが明らかとなった。それをふまえ、他大学の教員らと協同で、セルフスタディの方法論を用いた省察と授業改善を行った。実践の結果、理論的根拠の形成を支援する教師教育は学生の新たな教育観の獲得にポジティブな影響を与えた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでの研究で、教師志望学生が教員養成期において大学での学びを捨て去り（洗い流し）、自らが受けてきた教育にもとづく教育や授業のあり方へと回帰してしまう問題が指摘されてきた。本研究を通して、この問題を回避するためには、教師教育者である大学教員の教員養成期～初任期における積極的かつ継続的な介入が有効であることが明らかとなった。加えて、そのような介入を行う教師教育者の実践のあり方を模索するための方法論として、自らの実践を共同研究者とともに批判的に省察・改善していく営み（セルフスタディ）が有効であることが示唆され、実際に自らの所属校での実践を通して学生に一定の変容をもたらすことができた。

研究成果の概要（英文）：In order to prevent the preservice teachers' "washed out" of learning in their teacher training period and the return to the educational philosophy based on the experiences of the students, I carried out literature review about the research of "rationale development" and educational practice based on it.

In the literature review, it became clear that the active intervention of teacher educators to teachers from the teacher training stage to the initial stage was effective for the prevention of "washed out". Based on the result, I worked on reflection and lesson study using the methodology of the self-study in cooperation with teachers of other universities. As a result of the practice, the teacher education which supported the formation of the "rationale" had the positive effect on the acquisition of the new educational view of the students.

研究分野：社会科教育，教師教育，教員養成

キーワード：社会科教師志望学生の成長 駆け出し期の教師 介入研究 Rationale Development 理論的根拠 セルフ・スタディ 教師教育者 駆

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

中等社会系教科の教員養成教育における大きな課題として、学生自身が高校までに学んできた経験に規定された授業イメージを再生産してしまう「洗い流し(Washed-out)」問題がある。

研究代表者はこれまで、国内の複数の教員養成系大学・学部を対象としたカリキュラムと学生の実態調査を通して、学生は既に大学カリキュラムの学びの中で繰り返し「洗い流し」の機会にさらされているという点を解明してきた。これらをふまえ、主として調査を行ったある国立大学を事例として、教育的な「危機」をプログラムに組み込んだ教員養成カリキュラムの改善案を提案することができた。

一方で、この一連の研究では、「どのような理論を根拠に学生に「危機」を経験させればよいか」「改善した養成カリキュラムの有用性をどのように検証すればよいか」という点を明らかにできていなかった。

2. 研究の目的

この成果と課題をふまえ、本研究では同様の問題に直面し、それに対処する理論として欧米諸国で注目されている「Rationale Development (理論的根拠の形成)」概念をとり入れた養成カリキュラムや方法論を調査すること、この概念を活用した教員養成・教師教育実践を日本で行う際の方法論や留意点を検討すること、の2点を目的とした。

3. 研究の方法

本研究は、「Rationale Development」概念とその方法論をとり入れた中等社会系教員養成カリキュラムおよび実践の調査・開発を、以下の視点と方法で進めた。

第一に、諸外国において、「Rationale Development」の概念に依拠した、あるいは類似する理念にもとづく中等社会系教科の教員養成を行っているカリキュラムおよび担当者を調査し、理論面・実践面での示唆を得た。そのために、ケント州立大学(米国)、ボストン大学(米国)、ウィーン大学(オーストリア)、グラーツ大学(オーストリア)、ノルウェー工科大学(ノルウェー)の訪問、授業観察、教員養成担当者への聞き取り調査、および関連する研究の文献調査を実施した。

第二に、代表者が所属する徳山大学教職課程を事例として、「Rationale Development」の思想と方法論をとり入れた中等社会系教員養成カリキュラムの実現に向けた試行実践を行った。代表者は教職課程のカリキュラム開発および全学年の授業を幅広く担当しているが、その中でも本研究では2年次生を対象に開講している社会科教育法(中学校社会科)を検証の対象とした。また、授業改善を行う際の方法論として、自らの実践を共同研究者とともに批判的に省察・改善していく営みであるセルフスタディを採用し、国内の複数の大学に所属する社会科教育学領域の教員と共同で検証を実施した。

4. 研究成果

本研究を通して、「洗い流し」問題の回避のためのカリキュラム・実践の両面からの示唆が得られた。具体的には、以下の3点にまとめられる。

第一に、教員養成期～初任期にかけての、いわば「駆け出し期」における信念形成の重要性である。これまでの研究が明らかにしているように、この時期の教師志望学生は大学カリキュラムから初任校での経験の中で繰り返し「洗い流し」の機会にさらされている。諸外国の研究や大学関係者への調査を通して示唆されたのは、彼らが教員養成と初任期を明確に線引きせず、一体的なものとして Rationale Development (理論的根拠の形成) に取り組んでいることだった。すなわち、大学カリキュラムにおいて Rationale Development を意識した教師教育だけでなく、そこで形成した Rationale を初任期での経験・葛藤といかに整合させていくのかについても、フォローしていく手立てを構築していく必要があることが示唆された。

第二に、Rationale Development における教師教育者の役割の重要性である。「駆け出し期」の教師の信念形成をいかに支援するかを考える上で、メンターあるいはスーパーバイザーとして彼らの成長を支援する立場の人間、すなわち教師教育者の果たす役割は極めて大きい。諸外国の事例では、大学の中に教育実習担当の専任教員ポストを用意して実習先とのコーディネートや教育実習生の訪問指導を行ったり、大学教員が卒業した学生に継続的に授業実践の聞き取り調査を行う中で初任校での経験を省察する支援をしたり、大学に教科教育に関わる教材の開発や学校との連携事業を行う専門のセンターを設置して現職教員が利用できるようにしたりと、さまざまな形の人的・物的な支援を行っていた。このような支援を行う中核になる教師教育者の性質は多様であるものの、みな「駆け出し期」の教師の Rationale の形成を支援することの重要性を認識し、支援のための理論とノウハウを持っている点では一致していた。

第三に、教師教育者の力量形成の手段としてのセルフスタディの有効性である。ここまで述べたように、「駆け出し期」の教師の Rationale の形成支援は教師教育者の力量、すなわち「教師にこれまでの教師の実践を省察・改善するための信念を形成させるにはどうすればよいか、そのためにどのような場面でどのように介入・支援を行えばよいか」について、理論と実践の両面でアプローチするための資質・能力を持ち合わせていることが求められる。このような資質・能力についての定義やそれを形成するためのスタンダードが存在しないため、個々の教師教育者が自律的に研鑽を積んでいくほかはない。そのための方法として、「批判的友人」とともに自らの

実践を省察・改善し、自己の変革のみならず組織や制度の変革への示唆を得る方法論であるセルフスタディが有効に機能する。実際に代表者が他大学の教員とともに実施したセルフスタディによって、学生の Rationale development の支援に関わる実践的な知見が得られただけでなく、所属校の教職課程カリキュラムの課題や改善の可能性にも有益な示唆を得ることができた。

今後の研究では、これらの成果をふまえて、「駆け出し期」の教師への介入的研究や、大学教授や現職教員と連携したセルフスタディを通して、教師教育における Rationale development の意義を追究していきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

1. 大坂遊・渡邊巧「社会科教師教育者は駆け出し教師の成長をいかに支援しうるか：米国社会科における「Rationale Development」研究に注目して」『徳山大学論叢』第87号, 2018年, 97-110 (査読なし, URL: http://www.tokuyama-u.ac.jp/local/eco_academy/80-89.html)
2. 大坂遊「わが国における中等社会科教員養成カリキュラムの仮説的類型化:3 大学のカリキュラムの構造と学生への質問紙調査の分析を通して」『徳山大学論叢』第86号, 2018年, 21-44 (査読なし, URL: http://www.tokuyama-u.ac.jp/local/eco_academy/80-89.html)
3. 草原和博・大坂遊「世界の研究動向から考える 社会科授業の理解に役立つ12のキー概念 (第12回) PDCA サイクル/ALACT モデル」『社会科教育』第719号, 2019年, 124-125 (査読なし, URL: <https://www.meijitoshoh.co.jp/detail/03719>)

〔学会発表〕(計9件)

1. 大坂遊・岡田了祐・斉藤仁一郎・村井大介・渡邊巧・川口広美・堀田諭・後藤賢次郎・南浦涼介「社会科教育学で創出された知を教員養成の場へ如何に還元するか：若手研究者による挑戦」全国社会科教育学会第66回全国研究大会, 2017年
2. 大坂遊・岡田了祐・川口広美・後藤賢次郎・斉藤仁一郎・堀田諭・南浦涼介・村井大介・渡邊巧「若手教師教育者の教育実践とその背景：大学院生はいかにして教師教育者になるのか」第4回広島大学教育ヴィジョン研究センター(EVRI)研究拠点創成フォーラム(招待講演), 2018年
3. 大坂遊・斉藤仁一郎・村井大介・渡邊巧「教師教育者の専門性開発とセルフスタディ：社会科教育学の研究成果と課題を踏まえて」第2回日本教師教育学会「研究推進・若手交流支援」企画(招待講演), 2018年
4. 大坂遊「教師になるための授業力はいかに成長するか：教科の指導力を形成するために有用な「危機」について考える」教員養成カリキュラムの改善に関わる研修会(招待講演), 2018年
5. 大坂遊「教員養成は学生が直面する「洗い流し」や「回帰」に抗うことができるか? : X 大学におけるケーススタディが示唆する中等社会科教員養成カリキュラム改善の視点」日本教師教育学会第28回大会(招待講演), 2018年
6. 大坂遊「社会科教育研究者として, また, 教師教育者として, 学校現場にどのように関わってきたか: 「若手のなんでも屋さん」を期待される立場から」社会認識教育学会2018年度研究会(招待講演), 2018年
7. 大坂遊・渡邊巧「社会科教師教育者は駆け出し教師の成長をいかに支援しうるか：米国社会科における「Rationale Development」と「Reflection」に注目して」日本社会科教育学会第68回全国研究大会, 2018年
8. 川口広美・大坂遊・草原和博「教師から教師教育者への移行に見られる非連続と連続：日本のベテラン教師教育者の事例研究」広島大学教育ヴィジョン研究センター第10回研究拠点創成フォーラム「教師教育者に関する国際シンポジウム」(招待講演・国際学会), 2018年
9. 大坂遊「教員養成課程を通じた学生の成長：教科指導の信念と授業構想の力量形成に注目して」文部科学省委託事業「平成三〇年度教員の養成・採用・研修の一体的改革推進事業 教科教育コアカリキュラムの研究」成果報告会(招待講演), 2019年

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：

国内外の別：

取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

1. 「教育改革における教師と研究者の役割 - 社会と教育の多文化化のなかで - 」を開催します (<https://www.hiroshima-u.ac.jp/ed/news/43798>)
2. 【成果報告】「教育改革における教師と研究者の役割」を開催しました (<https://www.hiroshima-u.ac.jp/ed/news/44390>)
3. 研究拠点創成フォーラム(10)「教師教育者に関する国際シンポジウム」を開催しました (<http://evri.hiroshima-u.ac.jp/2697>)

研究代表者は本務校である徳山大学とは別に、広島大学大学院教育学研究科に教育研究推進員として所属している。広島大学において、主として担当している「教育ヴィジョン研究センター」の公式ウェブサイトや教育学研究科において、研究代表者が本科研の業務として従事した活動に関する案内や報告(文章は研究代表者が作成)が掲載されているため、本項ではこれらを研究成果物として記載する。

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：岡田 了祐(お茶の水女子大学), 川口 広美(広島大学), 草原 和博(広島大学), 後藤 賢次郎(山梨大学), 斉藤 仁一郎(東海大学), 堀田 諭(東京大学), 南浦 涼介(東京学芸大学), 村井 大介(静岡大学), 渡邊 巧(広島大学), Todd S. Hawley(ケント州立大学)

ローマ字氏名：Okada Ryosuke, Kawaguchi Hiromi, Kusahara Kazuhiro, Gotou Kenjiro, Saitou Jinichiro, Murai Daisuke, Watanabe Takumi, Todd S. Hawley

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。